
twilight

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t w i l l i g h t

【Nコード】

N 1 3 0 4 A

【作者名】

クノウ

【あらすじ】

最終兵器彼女のちせがシュウジに告白されるまでのストーリー。

「ちせ、なにボーっとしてんのよ!!早く行くよ。」

「あ、待ってよアケミ」

「ほんと、あんたはとろいんだから。フミコ達も先に待ってるんだからね。」

「うん、ごめんなさい。」

「だから、ごめんはいっていつてるしょや。」

「う、うん…」

一時間後……カラオケ店にて

「ほら、次ちせの番。」

「え、わたし?」

「当たり前でしょ、みんな歌ったんだから次はちせよ。」

「うう〜」

「ほら、覚悟を決める!!」

そして音楽が流れてくる

く　く　く　く　く　く　く　く

パチパチパチ……

「ちせ、あんた声はいいんだけどね」

「うん、いいんだけど…」

「けど?」

「「声が小さい」」

「はうう〜だつて…」

「だつてじゃない!!カラオケなんだから、もっと大きな声を出す

「！知らない人の前じゃないんだからもつと腹から声出さないよ。ドゥンと。」

「そうそうドゥンと、ね？」

「で、でも……」

「ああ……イライラする！ちせ、あんたもつと度胸をつけなさい。言うでしょ、『女は度胸』って」

「そうはいっても……」

「みんな、何かいい案ない？」

「う……ん」

「こんなのは？思い切って色っぽくイメチェンしてみるっていうのは」

「却下」

「ええ……なんで？」

「ちせに色気は無理よ」

「そりゃそうだ」

「ヒドイよみんな」

「これはどう？エッチな本を買ってくるの。」

「あつ、それいいかも。」

「わたし、絶対やだ！！」

「おお、その声よちせ。その声を出せればいいんだけどね」

「もう、みんな遊ばないでよ」

「やっぱり、年頃の女の度胸だめしといったら、アレしか無いでしょ。」

「アレ？」

「そつ、こ・く・は・く」

「それよ……ちせ、あんた告白しない。」

「ええ……無理、無理、わたしにはできないよ」

「いいからいいから、あんたたしかシュウジのこと好きだったでしょ？あいつなら、無口で口悪くって、おっかないから、度胸だめしにはちょうどいいわ。ダメもとでいいから 告ってみなつて。」

「そうそう、もしかしたら可愛いちせからの告白に、おもわずOKしちゃうかも。」

「うんうん、やってみなよ、ちせ。これも訓練のつもりで。」

「ほら、ここで勇氣出さなかったら、一生このままよ、いいの？ちせ。」

ブンブンブン（頭を振る音）

「い…いやだ……」

「じゃあ、勇氣を出す！善は急げよ、決行は明日！！」

「えゝ明日！？早すぎるよ、まだ心の準備が……」

「そんなのしないでいい！！恋は体当たりよ、ちせ。」

「そう、たとえ玉砕してもいい…そんな気構えで挑まなきゃね。」

「ファイトよちせ！！」「う、うん…わかった。頑張ってみる！！」

「そのいきよ、ちせ！」

「じゃあ、今から作戦会議よ」「オー！！！」

「やっぱり、屋上か体育館裏に呼び出すのどう？」「うん…一般的過ぎない？」

「ここは、登校か下校中にドーンとアタックするしかないんじゃない？」「それもいいけど、人が見てるところだと絶対言えそうにないし。ここは……」

ゴクッ…

「ちせ、シュウジに襲い掛かっちゃいなさい！！あたし達で人氣の無いところに呼び出してあげるから。あいつはアレでけっこううぶだから、思い切って迫っちゃえば大丈夫よ。既成事実作っちゃえば、シュウジも言い逃れ出来ないし、ちせもめでたく彼女よ！！」

「ハハハハハ！！」「それいいよ！！」「ちせ、やってみな！？」

「みんな私で遊ばないでよ」
この人たちに期待した自分がバカだったと、激しく後悔するちせだった……

そんなこんなで、結局『手紙で告白する』に決まった。

「じゃあちせ、明日の朝までにちゃんと手紙書いてくるのよ。あとは下駄箱にでも入れとけば いいんだから。」

「う、うん。じゃあね、アケミ。」「バイバイ、また明日ね。」
そうしてみんなと別れた。

「うー、手紙ってどう書けばいいんだろう？ やっぱ相手の良い所とか好きなところを書くのかな？」

でも、私シユウジ君の何処が好きなんだろ？ いつの間にか好きになつてたし……

あまり話したことも無いし……」

そうやって白紙の紙と数時間ほど睨めっこして、手紙を書き上げた。
最後に

『私と、つき合ってください』

と付け加えて……

翌日

「どうだったちせ、手紙は入れた？」「うん……」で、返事は？」

「ま、まだなの。」

「かゝゝあのバカは何やってるのかね！？ 普通すぐに返事をしない

のか？まったく。」

「ううん、いいのアケミ。わたし、気持ちを伝えられただけで満足だし、べつに返事なんて……」

「あまーい！！」「キャッ」

「告白は、返事を貰ってこそその告白よ。待ってなさい、今首根っこ引つつかんで連れてくるから」

「い、いいよアケミ。わたし、告白できただけで満足だから。もう、かまわないで！！」

ちせは、走って何処かに行ってしまった

「あちゃーちよつとかまい過ぎたか」「どうすんの？アケミ。」

「まあ、ちせがああ言ってるんだから、少し一人にしろってあげよつか。」「そうだね。」

放課後

「はー、結局返事もらえなかったな……」

みんなにああいった方がいいが、やっぱり気になる。シュウジは自分の事をどう思っているんだろう？

ただのクラスメイト？それとも……

授業中、何度かシュウジのほうを見てみたが、いつもと変わらずに授業を受けているシュウジを見ると、全く相手にされて無いのでは？と不安になってくる。

「せめて、返事ぐらい……」

そして昇降口で下駄箱を開けたとき、手紙が入っていた。

『放課後、屋上で待ってます』

それだけの簡単な文章……

送り主の名は…書いてない
でも、ちせには送り主がすぐわかった。体温が上がるのがわかる。
急いで屋上に向かった。

「ハアツハアツ……」ガチャツ
屋上の扉を開ける。見回してみる。誰もいない……
いや、入り口から死角になっているところに誰か居る。
間違いない。シュウジだ

ただでさえ走ってきて鼓動が速くなっているのに、胸が張り裂けて
しまつぐらいにさらに鼓動が速くなる

一步一步、シュウジに近づく。

「あ、あの……」おそろおそろ声をかける

「あ、ああわりい、こんなところに呼び出して……」

「うっん、わたしのほうこそ、困りましたよね？突然あんな手紙渡
されたら……」

「ま…まあ、困ったというよりビックリした。オレ、この手の話に
疎くて、その……なんて返事したらいいか思いつかなかったから、
放課後になっちまって。やっぱ自分の口で返事しようと思ってさ。」

胸が高鳴る… 憧れの人と二人きり。それにいつもは仏頂面をして
いるシュウジが、照れている。

それだけでドキドキしてくる
自分は『度胸だめし』のつもりで告白したのに、この人は本気で考
えてくれた。それだけで嬉しい

「オレの返事は……」

顔が赤くなる…

すぐにでも逃げ出したい、でも最後まで

「いいぜ、つき合っても」

聞いた　ホッとする　返事がもらえた　それだけで満足だ
べつにつき合えなくても……

（え？）

「今…なんて？」

「だ、だから…　いいって…」

「え？」　「だから、いいぜ……その、つき合ってやっても……」

聞き間違いじゃない。確かにOKの返事がもらえた……

「う、嘘じゃないですよね!？」

「そんなはずないだろ!!オレだって悩んだんだからな。」

ポロツ　ポロツ　……　涙が出てくる

「お、おいどうしたんだよ!？」

「い、いえ。なんでもありません。ただ、安心したら涙が出てきちゃ
って…」

「そ、そうか…」　「い、ごめんなさい。」　「べつに謝る必要なんか
ねえよ。」

「あ！そうですよね。」

.....

「涙は止まったか？」「あ、はい……」「そうか……」
「あ……あの……」「ん、なに？」「い、一緒に……」
シユウジの顔が少しこわばる
「ご、ごめんなさい。やっぱりべつにいいです。」

ああ、まただ……わたしはどうしてこんなに勇気が無いんだろう。
たった一言……

……一言『帰ろう』って
言うだけなのに

「いいぜ。」「え？」「帰ろうってんだろ？」
「あつ、はい！で、でもいいんですか？わたしなんかと一緒にで……」
「ばーか。お前、オレの彼女なんだろ？それ位べつにいいじゃねえか。」

そう言ったシユウジの顔は、今まで見たことないくらい恥ずかしそうになっている。

べつに今すぐ度胸をつけなくてもいい……
少しずつ、少しずつ想いを伝えられるようになれば。

とんだ度胸だめしになってしまったが、告白できてよかった。
ずっと『憧れ』の存在で終わると思っていたこの気持ち、相手に
伝わりそれ以上の関係になれたのだから。

この先ずっとではないかも知れない。でも、この人の側にいられる

間だけでいい。

こんな幸せが続けば……

夕暮れの帰り道、二人で歩きながらそんな事を考えていた。

〔END〕

（後書き）

< font size = 2 > まずはじめに、すいません。自分で読んでも違和感があります。

自分の文章力の限界を感じます。 最彼は、キャラの特徴が深い部分でつかみにくくて、書くのが難しかったです。

いつもはキャラに感情移入したり場面を想像して書くのですが、その『深い部分』がうまくつかみ取れませんでした。

高橋しん先生の凄さを改めて実感します。 なので最後のほう、もう適当です。

最初に考えた終わり方が、全然まとまりがなく不自然過ぎたので急遽付け加えてみたんですが、それでもまだ納得いかない…… < / font >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1304a/>

twilight

2010年10月14日13時45分発行